

2023年度 一般入学試験 後期日程

国

語

(試験時間 60分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、31ページあります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 試験コード欄・座席番号欄

試験コード・座席番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名・フリガナを記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～11)に答えなさい。

① smartという単語は、もともとゲルマン^(注1)共通基語である「smertan」から発達した古期英語「smeortan」に起源をもつと推定されている。その後、この言葉は中期英語における smerte に変化し、一三世紀には一般的な形容詞として用いられるようになった。ただしその意味は今日の smart とまったく異なったものだった。 smerte が意味していたのは何よりもまず「痛み」であった。それは、この言葉が smertan から発達したことから説明できる。この言葉を構成している「merd」は「痛み(pain)」を意味し、またさらにそのうちに含まれる「mer」は、「摩擦する(rub)」、「消費する(consume)」、「使い果たす(exhaust)」という意味をもっていた。【 a 】この「mer」はギリシヤ語の「marainein」と同族の語であり、その意味は「使い果たす／消耗する」ということであるとされる。また、 smeortan が由来する smertan は、その後、ドイツ語の「Schmerz」へと変化し、この言葉は現在でも「痛み」を意味するもつとも一般的な語として使われている。

② 当初は肉体の痛みを指していた smerte は、その後、精神的な痛みを指すように変化していった。そして、「刺すような」「鋭い」「きびきびとした」とその意味合いを変えていき、一七世紀には「賢い」を意味する言葉として使われるようになった。【 b 】英和辞典を引けば現在でも「〈傷などが〉ひりひりとする」という形容詞的用法や、「〈傷などが〉うずく」「傷心する」といった動詞的用法があり、その語源的な意味は失われていない。

③ スマートさは賢さである。そして、語源的に考えるなら、その賢さは痛みから立ち現れる。しかし、痛みと賢さの間には大きな隔たりがあるように思える。なぜ、痛みが賢さへと転じていったのだろうか。スマートなもの^Aの賢さは、そのうちに、どのよう^Bに痛みの歴史を抱えているのだろうか。

④ 藤本^(注2)は、ドイツ語において痛みを意味する概念として「Schmerz」を「Leiden」から区別している。Leidenは「ある事柄を耐える」ということを意味する古代ゲルマン語動詞「lidan」に由来し、出来事を受動的に耐える人間のあり方を指している。これに対して、Schmerzが意味しているのは「⁽¹⁾ずきずき痛む⁽¹⁾」⁽¹⁾チジヨク・後悔・報いなどのために苦しむ、身体が痛む」といったことであり、

一七世紀以降は、生理学的医学的「苦痛」を表象する用語として使用されてきた。この語を *Leiden* から区別しているのは、それが「人間に直接的に加えられた破壊力によって引き起こされた現象に対する人間の反応を示す」という点にある。

5 人間の生における *Schmerz* の意味を考える上で、手がかりになるのは、近代ドイツの哲学者イマヌエル・カントが『人間学』において述べる次のような洞察だ。

6 私の今の状態を放棄するように（今の状態から脱出するように）直接的に（感官を通して）私を突き動かすものが、私にとって不愉快なのであり、——これが私に苦痛 (*Schmerz*) を感じさせる。

7 カントによれば、苦痛を特徴づけているのは何よりもまず「私の今の状態を放棄」させることである。たとえば、「私」が家具に足をぶつけ、その結果として苦痛に苛まれたとしよう。このとき「私」は一瞬のうちに痛み込み込まれ、それ以外のことを感じられなくなってしまう。そのとき、たとえ飴を舂めており、それまでその甘さを楽しんでいたとしても、足の痛みはその味覚を一瞬のうちに忘れさせてしまう。あるいは、足をぶつける直前まで、「私」が明日のスケジュールを考えていたとしても、足をぶつけてしまえば、その思考はすべてが白紙に戻り、どこかに吹き飛んでしまう。

8 カントによる苦痛をめぐる洞察のポイントは、単に不快なものが外部から「私」を襲い、それに対して「私」が受動的になる、という点にあるのではない。むしろそれは、その苦痛の到来によって、いま「私」が関係しているものがすべてシャットアウトされ、白紙化される点にある。痛みは、「私」の現在の状態のなかにカサ^口ンされ、「私」が関わっている他の物事と並列されるものではない。そうではなく、「私」に対して痛み以外のことを考えたり感じたりすることを不可能にし、その痛みだけが「私」を占拠するという点にこそ、痛みの本質があるのだ。

9 二〇世紀の政治思想家であるハンナ・アーレント^{註4}の洞察もまた、カントの発想と重なり合うものである。アーレントによれば、苦痛とは「他の対象から完全に独立しており、苦痛にある人だけが本^本当にただ自分だけを感じる」体験である。苦痛を感じてい

るとき、人間は苦痛以外のすべてのものとの関係を断たれ、その苦痛に苛まれる自分とだけ向かい合うことになる。彼女はさらに次のように述べる。

10 実際、私たちが知っている中で最も激しい感覚、そしてそれ以外のすべての経験を消し去ってしまうほど激しい感覚といえ、まず、大きな肉体的苦痛のことが思い出されよう。しかし、この肉体的苦痛は、同時に、すべてのもののうちで最も私的で、最も伝達しにくいものである。激しい肉体的苦痛というのは、おそらく、公的現われに適した形式に転形できない唯一の経験であろう。そればかりか、肉体的苦痛は、私たちからリアリティにたいする感覚を実際に奪うので、肉体が苦痛状態にあるときは、真先にリアリティが忘れられてしまう。私が自分自身をもはや「認識」できないほどリアリティを見失っている、この最も極端な主観的状态から生活の外部的世界へ脱けだす橋は存在しないように見える。

11 リアリティとは、要約すれば、自分が感じていることを、他の人も同じように感じているということだ。たとえば「私」にとつてリングが赤いということがリアリティをもっているのは、「私」だけではなく、「私」以外の人々も同じようにリングを赤いと感じているからだ。もしも「私」がリングを赤いと感じているのに、他の人々がそれを青いと言っていたら、どれだけ「私」にとつてリングが赤く見えていても、その認識はリアリティをもたないだろう。この意味において、人間の認識のリアリティはあくまでも他者との関係において成立する。アーレントは、そのように私たちが他者と関係する領域を、公的領域と呼ぶ。リアリティは公的領域と密接に連関するのである。

12 これに対して、苦痛は人間を公的領域から遮断する。「私」には、「私」が直面している苦痛を他者と共有することができず、「私」の痛みを他者に分かちてもらうこともできない。苦痛に苛まれているとき、もはや人間は、他者のことを気に掛けているヨウウをもてない。自分のことで精いっぱいになるのであり、他者との関係から切断され、自分ひとりと向かい合わなければならなくなる。だからこそ、苦痛はリアリティをもたないのである。

13 苦痛をめぐるカントとアーレントの分析に通底しているのは、それが、「私」を「私」以外のものとの関係から切断し、「私」の意識を全体として占拠するということだ。では、このことは賢さとどのように関係するのだろうか。

14 前述の通り smart の語源である「痛み」は、その所在が肉体的苦痛から精神的苦痛に変わり、そしてそれが「刺すような」というニュアンスを帯び、「鋭い」という意味をもつことで、「賢さ」へと変化した。このようなヘンセンを辿るとき、そこで意図されている痛みは、じわじわと蝕まれるような痛みではなく、一挙に全身を支配する痛みである、と推察することができる。それはたとえば、刃物によってもたらされる痛み、神経を切断されることによる痛みである。

15 痛みが一挙に全身を支配する、ということは、言い換えるならそれが「私」の感覚を占拠し、痛み以外に何も感じなくなる、ということである。何かを感じる、ということは、外からの何らかの刺激を受容することであり、その意味で外界との関係を前提としている。何かを感じるとき、それによって私たちは、その感覚を与えた他者との関係を感じることになる。しかし痛みは、他の感覚を排除することによって、そうした感覚に伴う他者との関係も排除する。この意味においてそれは、現在「私」が置かれている他者との関係を「私」に放棄させ、「私」を自分自身とだけ関係させるよう強いるのである。

16 痛みを感じていない状態と、痛みを感じている状態の違いは、散逸と集中の対比によっても理解できる。痛みを感じていないとき、私たちは雑多な感覚に包まれている。たとえば私たちが映画館にいるとき、目ではスクリーンの映像を感じ、耳ではその音声を感じ、舌ではポップコーンの塩気を感じている。しかしこれらは必ずしも統一されていない。たとえば隣の席でスマートフォンをいじっている観客がいれば、スクリーンに集中できなくなる。耳元で大きな音でポテトチップスを食べている人がいれば、登場人物のセリフが理解できなくなる。うっかりきつすぎる服を着てきたら、苦しくて映画に集中できなくなる。これが感覚の散逸した状態である。一つの感覚に集中しようとしても、そこに別の余計な感覚が介在し、そのために集中したいと思っているものに集中できない状態だ。だからこそ映画鑑賞を趣味として極めるためには、自分の集中力を鍛えることが必要なのである。

17 それに対して、痛みによって感覚が占拠されている状態とは、感覚が痛み集中しており、痛みを遮る別の感覚が存在しない

状態である。だからこそ、痛み支配されているとき、人間は余計なことを感じることから解放されている。痛みは強制的に人間を痛みだけへと集中させるのである。

18 このように考えるなら、それ以外のものが何もない、ということのうちに、痛みが認識に対して及ぼす独自の特徴を洞察することができるとも知れない。こうした意味合いが、「それ以外」＝「余計なこと」を配慮する必要がない、という形に理解されるようになり、ここから「鋭い」という意味への転化を引き起こしたのではないか。

19 「刃物が鋭い」という表現において意図されているのは、刃物が物体を切断しようとするとき、何にも引っかからないということ、あるいは狙っていないものを傷つけないということであろう。たとえばトマトのヘタを実から切断するために、刃の摩擦した鈍なまを使ったら、ヘタと実の境を精確にヒットすることができず、両者を潰してしまう。その場合には、本来は食べられるはずだった実の部分を、余計に損耗してしまうことになる。これに対して、刃の鋭い包丁であれば、ヘタと実を精確に切り分けることができる。余計なものを傷つけることなく、目的を達成することができるのだ。だからこそ、鋭い刃を使っていれば、私たちは「実を潰してしまっただろうしよう」などと余計なことを考えなくて済むのである。

20 こうした物体の形状の特徴としての「鋭い」が、人間のコミュニケーションに関わる事象に転用されるのも、同じ発想から説明できる。「鋭い批判」とは何だろうか。それは核心を突いた批判だ。では核心を突いた批判とは何だろうか。それは、批判者の理解不足や誤解のために生じた批判ではなく、批判者が相手を十分に理解したうえでなされる批判である。もし、理解不足や誤解に基づいて批判がなされるなら、批判された者は、まずはもう一度同じことを説明しなければならなくなる。しかしそれはその議論にとって時間の無駄である。また、そうした説明をするとき、説明者は、どこから何を説明しなければならないのかを、あれこれ思案しなければならない。批判された者はそのときに、しっかりと説明を聞いてくれれば話す必要がなかったこと、つまり余計なことを話さなければならなくなる。「鋭い批判」は、そうした余計な説明を省略させるからこそ、「鋭い」のである。

21 E ここから「賢い」が立ち現れてくるのは、もはや何も不可解ではないだろう。スマートフォンが「賢い」のは、それ以外に時計、カメラ、ウォークマン、メモ帳、ボイスレコーダーといった、余計なものをもたなくて済むからだ。スマートウォッチが「賢い」

のは、それ以外に、万歩計、心拍数メーター、サイフ^(ホ)といった、余計なものをもたなくて済むからだ。スマートデバイスの本質は、余計なものと同様でなくて済む、という点にある。そしてそれは、痛みが私たちを他者との関係から切断することと連続している。スマホをポケットにいれさえすれば、私たちは、時計はもったか、カメラはもったか、ウォークマンはもったか、メモ帳はもったか、ボイスレコーダーはもったか、という心労から解放される。スマートフォンさえあれば何もいらないのであり、それ以外の道具についてあれこれ考えることは必要なくなるのだ。そしてそれは、激痛に襲われるとき、私たちがそれ以外の感覚を失うことと、軌を一にしているのだ。

(戸谷洋志^{とやひろし}の文章による。ただし、一部変更した。)

(注) 1 ゲルマン共通基語 … ゲルマン語派(ドイツ語・オランダ語・英語などの言語)の共通の祖先と想定されている言語。ゲルマン祖語。

2 藤本 … 藤本武。文化人類学者・民俗学者(一九六七)。

3 感官 … 感覚器官。

4 ハンナ・アーレント … ドイツ出身の政治哲学者・政治思想家(一九〇六―一九七五)。

5 公的現われ … 人々が、他者と接する人間世界に姿を現すこと。アーレントによる用語。

6 鉞 … 分厚い刃を持つ刃物の一種。林業や農作業で使われることが多く、繊細な作業には向かない。

問1 空欄〔 a 〕・〔 b 〕に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

〔 1 〕

・〔 2 〕

a

〔 1 〕

① たとえば

② つまり

③ そもそも

④ だが

⑤ とはいえ

b

〔 2 〕

① さらに

② 残念ながら

③ あるいは

④ なぜなら

⑤ ただし

問2 破線部ア「苛まれた」・イ「通底している」・ウ「介在し」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 3 ～ 5。

- ア 「苛まれた」
- 3
- ⑤ 責め立てられた
④ 直面した
③ 倒れた
② いら立った
① 惑わされた

- イ 「通底している」
- 4
- ⑤ 徹底している
④ 精通している
③ 欠落している
② 共通している
① 付随している

- ウ 「介在し」
- 5
- ⑤ 分離して
④ 干渉して
③ 誕生して
② 混乱して
① 援助して

問3 第①・②段落では「smart」についてのどのように述べられているか。その説明として適切ではないものを、次の①～

⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 6。

- ① 古期英語の「smeortan」をわらうに遡ると、起源はゲルマン共通基語に至ると考えられている。
- ② 「smeortan」は中期英語で「smerte」となったが、やがて意味内容に変化が現れた。
- ③ ゲルマン共通基語における「smertan」は、言葉の構成から考えて痛みという意味合いを含んでいる。
- ④ 古期英語における「smeortan」から、現代ドイツ語の「Schmerz」という単語が生まれた。
- ⑤ 英語における「smart」という単語には、現在でも「痛み」を表す用法が残っている。

問 4

波線部(A)「スマートなもの賢さは、そのうちに、どのように痛みを抱えているのだろうか」とあるが、ここには筆者のどのような問題意識が示されていると言えるか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 7。

- ① 「smart」の歴史をひも解くと見つかる「痛み」という意味は、「賢さ」と無関係とはいえないのではないか。
- ② 「smart」という語が持つ相異なる意味については、一致させる必要があるのではないか。
- ③ 「smart」本来の意味である「痛み」が、「賢さ」に展開する不思議さを説明するべきではないか。
- ④ 「smart」に従来あった「痛み」という意味が、どのような過程によって「賢さ」へと完全に置換されたのか。
- ⑤ 「smart」を語源的に見た際の真正な意味合いである「痛み」を、語義として復権させるべきではないか。

問5

波線部(B)「人間の生におけるSchmerzの意味を考える上で、手がかりになるのは、近代ドイツの哲学者イマヌエル・カントが『人間学』において述べる次のような洞察だ」とあるが、筆者は「Schmerz」に関するカントの洞察の要点はどこにあると考えているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

8

- ① 「Schmerz」は、心地よい感覚を奪うものである。
- ② 「Schmerz」は、表面的な孤独をもたらすものである。
- ③ 「Schmerz」は、他のものと比較して格段に不快な感覚である。
- ④ 「Schmerz」は、カントの思考のすべてを無内容にするものである。
- ⑤ 「Schmerz」は、それ以外の感覚を排除し独占するものである。

問 6 波線部(C)「だからこそ、苦痛はリアリティをもたないのである」とあるが、なぜ筆者はこのように述べるのか。その理由

として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 9。

- ① 苦痛を他者が感じている苦痛に置換することは、実際には不可能であるから。
- ② 苦痛とは、客観的表現に置き換えられないものであるから。
- ③ 苦痛は、当人にとっては他者と共有することのできない感覚であるから。
- ④ 苦痛という状態を、他者は察知することができないから。
- ⑤ 苦痛に見舞われた人間は、利己的に振る舞うようになるから。

問7 波線部D「このように考えるなら、それ以外のものが何もない、ということのうちに、痛みが認識に対して及ぼす独自の

特徴を洞察することができるかも知れない」とあるが、ここで筆者はどのような考察に基づいてどのように推論を組み立てているのか。これについて説明した次の文章の空欄 I III に入れるのに最も適切なものを、後の各群の

①～④の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 10 12。

smart の語源にあるのは、「痛み」の含意であった。このことは、カントやアーレントの考察を通じても確認されている。さて、そうだとするならば、それがいかに「賢さ」へと変化していったかが、やはり問題となる。

smart の歴史における「痛み」についてあらためて考察してみよう。痛みとはこの場合、穏やかな痛みのことではなく、全身を一挙に支配するような強い感覚と推定することができる。これは、痛みを感じていないときの私たちの感覚のありさま、すなわち I 状態とは異なる。筆者はここで刃物がもたらすような痛みを想定するが、そのような痛みのポイントを一つだけ挙げるならば、それは II ことである。

こう考えると、「痛み」が「鋭い」へ、さらには「賢さ」へと変化していった過程に有効な洞察を与えることができるかもしれない。なぜなら、このような痛みの特性は、 III からである。

I 10 ① 外界からやってきた雑多な感覚がひしめき合うような

② 集中をさまざまに他者を常に視野から排除するような

③ 望ましい感覚と望ましくない感覚との序列関係が明確な

④ 他者が作り出したさまざまな刺激を不快に感じているような

II

11

- ① 現在の身体感覚を部分的に制限する
- ② 私たちの知覚の世界を著しく個人的にする
- ③ 痛みの存在が思考自体を消失させてしまう
- ④ 痛み以外の感覚を感じなくさせてしまう

III

12

- ① 「不純な要素を含まない」知性を否定する
- ② 「効率に特化した」コミュニケーションを導く
- ③ 「余計な要素を排除した」認識に通じうる
- ④ 「多様な発想を無視した」思考につながる

問 8

波線部(E)「ここから『賢い』が立ち現れてくるのは、もはや何も不可解ではないだろう」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

13。

- ① 道具や会話における「鋭い」の意味は、余計な内容を不要にすることにある。現代の「賢い」機械に随伴する、余計な考慮を不要にするという意味作用を考える時、「鋭い」から「賢さ」が派生したことはとてもよく理解できるから。
- ② 「鋭い」には、必要なものを不要なものからの確に切り分ける機能がある。私たちが他者との関係性から切断する「賢い」スマートデバイスの普及ぶりを考えれば、両者の密接な関係性は全く理解困難なことではないから。
- ③ 「鋭い」の本質とは、目的と関係ない余計な要素を省くことである。一台ですべてをこなすばかりか手間の簡略化にも役立つ「賢い」スマートデバイスが「鋭い」の延長上にあるという理解には、非常に強い合理性があるから。
- ④ 余計なものを的確に切り分ける作用を持つ「鋭い」道具と、余計な要素や他者との関係性を遮断する「賢い」道具は、機能面で重なり合う点が多い。この点で、「鋭い」から「賢さ」が出現したことは確かだと断言できるから。
- ⑤ 「鋭い」の本質は、余計なものに関与しないことにある。余計なものを視野の外に切り捨てることを本質としたスマートデバイスを考えると、「賢さ」に「鋭い」の意味合いが含まれていることには相応の根拠があると考えられるから。

問9 第21段落で述べられている「スマートデバイス」についての内容の説明として適切ではないものを、次の①～⑥の中

から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

14

15

。

- ① スマートフォンやスマートウォッチといった今日の道具も、「賢さ」とは何かという考察の対象とすることが可能である。
- ② 余計なものを排除するスマートデバイスを使っているうちに、「smart」とはかけはなれた「痛み」がもたらされる。
- ③ 余計なものを持たないでいいスマートデバイスの特性は、余計な思案からの切断をもたらすことも意味している。
- ④ 余計なものを視野の外へ放逐するスマートデバイスは、「痛み」以外の感覚の喪失という問題に隣接している。
- ⑤ スマートデバイスを使うと余計なことに気をめぐらす必要がなくなるが、それは心理的負担の軽減にもなるだろう。
- ⑥ スマートデバイスの発展を通じて、「賢さ」とはそれに先立つ「鋭い」や「痛み」を超越した感覚であることがわかる。

問10 本文において、筆者はどのように論を展開しているか。その説明として適切ではないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

16

17

- ① スマートフォンやスマートウォッチなどの形で、私たちの生活には「smart」が浸透している。語源からその概念を検討すると「痛み」という意外な意味が見つかり、筆者はいかにして「痛み」が「賢さ」へと転換したかの考察を行っている。
- ② smartの語源史を振り返ると、「痛み」を意味するSchmerzという単語が要所となる。筆者はSchmerzの含意について、漠然と甘受する痛みよりも強く広範なものであり、それに耐えることでもあるとする研究上の知見を提示している。
- ③ 筆者が示す引用のうち、アーレントの考えでは、苦痛はリアリティを剝奪するものとされる。アーレントによれば、あるものの現実性の要件は他者との共有であり、個人が感じる痛みは共有の場とその個人との接続を断つものとなる。
- ④ 通常の感覚世界では多様な刺激が併存しているが、強い痛みはその瞬間から私たちの感覚への侵入を開始する。筆者は、痛みが全身をとらえる段階になるとそれ以外の感覚が失われ、思考や認識を自分にだけ向けるよう強いられると指摘する。
- ⑤ 「痛み」が個人の感覚を占めてしまうことは、痛み以外のものを認識しない状態と重なる。筆者は、これを余計なことを感じる状況から個人が解放されていると言い換えて、「痛み」が「鋭い」に転換されていた理由を推察している。
- ⑥ 筆者は、「鋭い」とは逸脱する要素を内包しないことであり、余計なものを不要にさせる作用であるとする。そして他のものに目を向けなくていいという点で「痛み」と意味を共有し、「賢さ」につながることを示している。

問11 二重傍線部(イ)～(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解

答番号は

18

22

(イ) チジヨク

18

- ① ヨウチナな考えにとられる
- ② 技巧がセイチチを極める
- ③ 人前で話すことにシユウチチシンを覚える
- ④ 友人のグチチを聞かされる
- ⑤ 列車のチエンチが案内される

(ロ) カサン

19

- ① 計画実行のサンダンがつく
- ② 相手の意見にサンドウする
- ③ 長きにわたってシンサンをなめる
- ④ 万策尽きてコウサンする
- ⑤ 大手企業のサンカに入る

(ハ) ヨユウ

20

- ① 物事をユウチヨウに考える
- ② ユウフクな家庭に生まれる
- ③ ザユウの銘を書に表す
- ④ 海外旅行でゴウユウする
- ⑤ 民族同士のユウワを図る

(ニ) ヘンセン

21

- ① 内部事情をセンサクする
- ② 飛行機が上空をセンカイする
- ③ 犯人のセンブク先を調べる
- ④ 考えるよりもジッセンする
- ⑤ サセンの憂き目に遭う

(ホ) サイフ

22

- ① 事業再建にフシンする
- ② 師匠に対してイフの念を抱く
- ③ 天から才能をフヨされる
- ④ 事態打開に向けたフセキを打つ
- ⑤ 新たな勤務先へフニンする

第2問

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

この部分に記載されている文章については著作権法上の
問題から公表することができませんので、ご了承ください。

『毎日新聞』 二〇二二年一月二七日 「余録」による

(注) スタイーブ・ジョブズ … アメリカ合衆国の起業家（一九五五―二〇一一）。アップル社の創業者の一人。

問1 本文では旅について取り上げられているが、旅における筆者自身の見聞や体験、およびそこから導かれる考察などについて

て書き記した随筆とその筆者の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番

号は 23。

- ① 『舞姫』 | 森鷗外
- ② 『武蔵野』 | 国木田独歩
- ③ 『夜明け前』 | 島崎藤村
- ④ 『レイテ戦記』 | 大岡昇平
- ⑤ 『街道をゆく』 | 司馬遼太郎

問 2 破線部ア「放浪」と近い意味の語句として適切ではないものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答

番号は 24。

① 彷徨 ほうこう

② 転々

③ 去来

④ 逍遙 しょうよう

⑤ 漂泊

問3 破線部イ「年配の」と対義となる表現として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答

番号は

25

。

- ① 春秋に富む
- ② 目にもあやな
- ③ 枯木に花の
- ④ 折り紙付きの
- ⑤ 齢よわいを重ねた

問4 波線部(A) 『岡山から旅をして来た』本だった」とあるが、「女性」はこのことをどうやって知ったか。その説明として最

も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

26。

- ① 店主にとって思い入れのある土地だったから
- ② 本の内側に仕入れた場所が書いてあったから
- ③ 本文を執筆した人物が取材に際して伝えたから
- ④ 別の客との会話が弾む中で内側を確認したから
- ⑤ 岡山で暮らす人が愛読していた本だったから

問5

空欄

X

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

27

。

- ① 問題点
- ② 出発点
- ③ 終着点
- ④ 妥協点
- ⑤ 交差点

問 6 本文の主旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

28

この部分に記載されている文章については著作権法上の
問題から公表することができませんので、ご了承ください。

問7 二重傍線部(イ)～(ホ)の品詞名を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は ～ 。

(イ) こうなりました

(ロ) 寝泊まりも

(ハ) あの人が

(ニ) 飛び続けたらしい

(ホ) それが

① 名詞

② 動詞

③ 形容詞

④ 連体詞

⑤ 副詞

⑥ 接続詞

⑦ 助詞

⑧ 助動詞